

いもせやまおんなていきん

妹背山婦女庭訓

〔解説〕

明和八年（一七七二）大坂竹本座初演。近松半二らの合作で、全五段の時代物。当時衰退していた竹本座がこの作品の大きたりにより盛り返したと言われるほど、人気のあつた作品です。物語は藤原鎌足親子による蘇我入鹿討伐を題材に、大和地方の伝説や謡曲、幸若舞曲などを取り入れ複雑な構成の大作となっています。

天智天皇の御代、蘇我入鹿は天皇派の藤原鎌足を失脚させ、自ら帝位につきます。入鹿は母が白い牝鹿の生血を飲んで生まれた為、超人的な能力を持っていましたが、爪黒の鹿の血と嫉妬に狂った女の血を混ぜ鹿笛に注いで吹くと、その力が失われるという宿命でもあり、ついにはその弱点を突かれて討伐されるのでした。

〔姫戻りの段 あらすじ〕

鎌足の子淡海（たんかい）は烏帽子折の求馬（もとめ）に姿を変え、三輪の杉酒屋の隣に住んでいました。杉酒屋の娘お三輪は求馬に想いを寄せますが、求馬のもとに恋人橘姫が尋ねて来ます。三人の想いがもつれ、逃げ帰る姫の袖に苧環（おだまき）の赤い糸をつけた求馬は、三笠山の御殿までたどり着き、橘姫が入鹿の妹であることを知ります。求馬は橘姫に、夫婦になる条件として、かつて入鹿が盗んだ神器、十握の剣を奪うことを誓わせます。

姫戻りの段

てこそ入りにける。

されば恋する身ぞつらや。出づるも入るも忍ぶ草。

露踏み分けて橘姫。すぐく帰る対の屋の障子には

らり打つつぶて。

「ソリヤお帰りの知らせぞ」

と銘々庭に集ひ降り、枝折開いて入れ参らせ

「おいとしやく、御所のお庭の内さへも、つひに

お拾ひなされぬに、恋なればこそ歩行裸足、さぞ朝

露でお裾も濡れん。小桂に召させ代へん」

と立ち寄つて

「ヤアお振袖に付いてあるこの紅の糸不審」

とたぐり手操れば、くるくると、糸に寄る身はさく

がにの、雲井の庭へ引かれ来る、主はゆかしの

「ヤア求馬様か」

『ハアはつ』と驚く姫よりも、騒ぎささめく局たち

「さても見事引き寄せた。七年物の恋人様か。よう

こそお入り遊ばした。サアくこちへ」

と手を取れば

「イヤ手前はついで道通り。この苧環を拾ひ上げるや

否、滅多に引かれ参つた者。何にも存ぜぬ。お赦し」

と出づる向ふを、立ち塞ぎ、

「エ、手の悪いなされ様。私らに御遠慮は、内々の

お話なら、どりやお次へ」

と立つて行く。姫はとかうの詞なく、差しうつむい

て思案の求馬

「ムウ、この御所の姫とあれば聞くに及ばず。入鹿

の妹橘姫」

と言はれて、はつと胸迫り

「入鹿が妹と知り給はば、よもお情はあるまいと、隠し包みし甲斐もなう、御存じありしお前こそ藤原の淡海様」

と言ふ口、ちやくと袂に覆ひ

「女なれども敵方に、我が名を知れば一大事。不憫なれども助け難し」

「オ、なるほどお道理ご尤も。生きて居る程思ひの種、お手にかかるがせめての本望。かういふ内もお姿やお顔を見れば輪廻が残る、サア／＼殺して下さんせ」

と刃を待つたる覚悟の合掌

「ムウ、心底見えた。が、まこと夫婦になりたくば、一つの功を立てられよ」

「一つの功を立てよとはえ」

「オ、入鹿が盗み取つたるこそ、三種の神器のその一つ十握の御劔。奪ひ返して渡されなば、望みの通り二世の契約。得心なければ叶はぬ縁」

「ア、是非もなや。悪人にもせよ兄上の目を掠むるは思知らず、とあつてお望み叶へねば、夫婦と思ふ義理立たず。恩にも恋は代えられず。恋にも恩は捨てられぬ。二つの道にからまれし。この身はいかなる報いぞ」

と忍び歎いておはせしが

「オ、さうぢや。親にもせよ兄にもせよ、我が恋人のためと言ひ、第一は天子のため。命にかけて仕おほせませう」

「オ、出かされたり。シテまた知らせの合図はなん

と」

「今宵御遊の舞に事寄せ、宝剣奪ひお渡し申さん。
笛や鼓の音をしるべ。奥の亭までお忍びあれ」

「しからば我れはこの所に暮るゝをしばし待ち合
はさん。必ず首尾よう」

「合点でござんす。が若し見付けられ殺されたら、
これがこの世のお顔の見納め。たとへ死んでも夫婦
ぢやとおつしやつて下さりませ」

「オ、運命拙く事頭はれ、その場で空しくなるとて
も尽未来際変はらぬ夫婦」

「エ、忝ない、嬉しや」

と抱きしめたるをしどりの、つがひし詞、縁の綱、
引き別
（れてぞ忍ばるる。）

しょううつしあきがおはなし

生写朝顔話

〔解説〕

天保三年（一八三二）大坂竹本木々太夫座初演。全五段、時代物。文政年間、山田案山子（近松徳叟）が儒学者熊沢蕃山の作と伝えられる『露の干ぬ間』という小唄をもとに想を構え、「生写朝顔日記」と題した浄瑠璃を竹本重太夫の為に創作しましたが上演に至らず、それを翌年、近松柳が「徳叟遺稿朝顔日記」という読本にして人気を呼び、耶麻田加々子が添削して浄瑠璃に仕立てました。その後、嘉永三年（一八五〇）萃松園が添補潤色したものが、現在の作品の基礎となりました。この浄瑠璃は、道中の名所が次々と出て来て変化に富み、すれ道いや錯誤・道化・慟哭等様々なドラマの要素が含まれることから、よく上演される人気作となっています。また、『露の干ぬ間』に琴唄を取り入れて、音楽的にも特徴のある作品になっています。

〔船別れの段 あらすじ〕

芸州岸戸家の家老の娘深雪は、京都の宇治川へ螢狩りに行った際、周防から儒学修業に来ていた宮城阿曾次郎と出会い、互いに思いを寄せます。阿曾次郎は深雪の扇に「朝顔の歌」を書いて渡し、再会を約束して別れます。二人はそれぞれ国元へ帰ることとなり、その途中の明石の浦で風待ちをしていたところ、偶然再会します。阿曾次郎は深雪の恋心に打たれ、一緒に連れていくことを決意するのですが、急に風が出て船が出港することとなり、二人は再び離ればなれになります。

船別れの段

わだづみの浪の面照る月影も、明石の浦の泊り船
風待つ種のつれづれを慰めかねて阿曾次郎、舳先に
立ち出で月かげに、四方よもを見はらす気晴しの、煙草
の煙り吹き靡く船路の旅ぞ物淋し。そばにかゝりし
大船は、秋月弓之助が帰国の乗船、乗り手も水夫かこも
船草臥ふなくたひれ、前後も知らぬ高軒

娘深雪はたゞ一人、目さへも合はぬ恋人を、思ひ焦
れてうつくと、恋に心をつくし琴、せめて慰むよ
すがもと、搔き鳴らしたる糸調べ

露のひぬ間の朝顔に、照らす日かげのつれなきに
「テ合点の行かぬ。あの歌は過ぎつる宇治の螢狩り
に、秋月の娘深雪が扇それがしに某が、書いて与へし朝顔
の唱歌。声さへ深雪に生写し。ハテいぶかしさよ」

と見上ぐれば、あなたも見下す月影に、顔はまさしく

「深雪殿ではないか」

「ヤア阿曾次郎様。逢ひたかつた」

とばかりにてわれを忘れて乗移るを、抱き取りて口
に手を当て

「ハテ声が高い深雪殿。思ひもよらぬ今の対面、な
にゆゑにこの所に」

「さればいな。宇治でお別れ申してより、片時忘れ
ず泣き暮らすうち、国元に騒動起り、父母ともにに
はかの旅立ち。所詮逢ふこと叶はぬかと、なんぼう
悲しう思うたに、こゝで逢うたは尽きせぬ縁。どう
ぞこの身をいづくへも、連れて退いて給はれ」
と、思ひ詰めたる娘氣の真実見えて可愛らし。阿曾

次郎も心を察し

「オ、嬉しいそなたの志、忘れは置かぬ、さりながら、そなたを今連れ退いては、某が武士道立たず。殊にこの度伯父の頼みにて、遁れぬ主用。なほもつて女を同道しがたき入訳。ある縁ならば添ふ時節もあらう。ガかうしてゐては人の咎め。サアちやつと元の船へ乗つても」

「エ、そりや聞えませぬ阿曾次郎様。添はれる時節もあらうとは、当座遁れの捨て詞。お氣に入らずば打明けて、包まずそれというてたべ。添はれぬ時には淵川へ、たとへ身を投げ死するとも、ふたゝびほかの夫迎へ、せぬを誓ひし身の潔白。さらば」
とばかり水底へ、既に飛ばんと立ち上がるを、あわて驚き抱き止め

「コレ待った。はやまるまい」

「イエ、放して殺して下さい」

「ア、是非もなし。それ程まで思ひ詰めた娘心、見殺しにどうせられう。不義いたずらと世の人口、誇らば謗れ連れて退く。これ尽未来まで女房ぞや」

「エ、嬉しいうござんす忝い」

とひつたり抱き月の夜の、影も隔てぬ比翼鳥、離れがたなき風情なり。阿曾次郎ふつと心つき

「このまゝに連れて退かば親達の、もしや淵川へも身を投げたかと、お歎きあらんは定のもの。委しい様子をつい一筆」

「オ、よういうて下さんした。私もさう思うてゐます。ガどうぞ料紙を貸して下さい」

「オ、心得し」

と懐紙、腰をさぐって

「南無三宝。そなたを今抱き止むる拍子、海へなにやら落とせし水音。旅矢立をはめてのけた。ア、どうしたらよからうぞ」

「オ、それなら待って下さんせ。二親はじめつきづきまで、旅草臥の寝入りばな。この間にそつと元船へいんで、一筆書置してきませう」

「フ、それよからう。ガコレ必ず物音させて、親達の目が醒めぬやう」

「心得ました」

と立ち上がれば、阿曾次郎は肩車、あなたの船へ乗り移らす。音に目覚ます船頭ども

「フ、地嵐が吹出したぞ。碇いかりを上げよ、帆を卷け」

と騒ぎ出せば、『なう悲しや』とあせるうち、船は

次第に遠ざかる

『コハなんとせん、かとせん』とあせるはずみに阿曾次郎が、船へ投げ込込む扇の別れ、後しら浪を隔ての船、つながぬ縁ぞ
(是非もなき。)

ごしよぎくらはりかわようち

御所桜堀川夜討

〔解説〕

文耕堂、三好松洛の合作で、元文二年（一七三七）大阪竹本座にて初演。源平の戦いを背景に、「平家物語」、「義経記」、弁慶や静御前の伝説を脚色した全五段の時代物です。三段目「弁慶上使」の段は人気が高く、文楽・歌舞伎でもしばしば上演されています。

〔あらすじ〕

源平の戦いに勝利した源氏でしたが、頼朝は義経に謀反の疑いをかけていました。義経の正室卿の君は平忠時の娘であったため、義経は頼朝から忠誠を示すために卿の君の首を差し出せと言われていました。

懐妊していた卿の君が侍従の太郎夫妻の館で静養しているところへ、弁慶が堀川御所からの使いとして現れます。もうこれ以上頼朝からの圧力を無視できないと、弁慶らは密談のため奥の間へ入ります。その間、館の腰元信夫（しのぶ）と娘を訪ねてきた母のおわさが、久しぶりに和んだ時を過ごしていました。

密談を終えた侍従夫妻が戻ってきて、信夫を卿の君の身代わりにと懇願します。信夫は主人の身代わりになるのなら、と快諾しますがおわさは承知しません。十八年前に一度契って別れたきりの信夫の父親に娘を会わせるまでは死なせるわけにはいかないと、当時稚児であった相手の着ていた振り袖の片袖を見せてそのいきさつを語るのです。

と、その時襖の向こうでこの話を聞いていた弁慶が、突然襖越しに信夫を刺したのです。一同が驚くなか、弁

慶は片肌を脱ぎ、おわさが持っているものと同じ片袖を見せ、自分が信夫の父親であると明かすのでした。驚きと悲しみにおわさは号泣し、弁慶もまた父と名乗れぬまま、娘を手になかなかつた悲しみに、生涯ただ一度の涙を流すのでした。

一方、信夫の首を落とした侍従の太郎は、身代わりが発覚しないようにと、自らの首をも差し出すために切腹します。そして二つの首を抱えた弁慶は堀川御所へと戻って行くのでした。

弁慶上使の段

共に語るにぞ

始終の様子聞く信夫、涙を押へ傍により

「ナウその御詞に及びませう、十年にあまる宮仕へも、たった一日御奉公申しても、お主様に違ひはない、不束な私でも、お役にさへ立つならば」

「ア、コレ〜母を差置きつかくと物言やんな、ハイ〜、イヤ申し、この子はアノ私一人で出来た子ではござりませぬ、顔も知らず名も知らぬ、父親がござります、その親を尋ね手渡しするまでは」

「ア、コリヤく、いかに狼狽へればとて、母親ばかりで出来る子が、三千世界にあらうかやい、その上、顔も知らず名も知らぬ、父親を尋ね手渡しするとは、マ何をしるしに尋ぬるぞ、アノコ、ナ偽り者、表裏

者めが、子心にさへ、主従の道を弁ふるに、エ、見限り果てたる女め、娘を連れて早帰れ、サ花の井こちへ」

と、立上る

「ノウコレ待つて下さりませ、偽り者と言はれては、親ゆえこの子の道立たず、顔も知らず名も知らぬ、夫を尋ぬる、印はこれ」

と、上の一重を押脱げば、右は変わらぬ詰袖に、左ばかりが振袖の濃き紅の染模様、橘ならぬ袖の香の、昔床しく偲ばしく

「娘が聞く前恥しき昔話、私は元、播州姫路の近在福井村、本陣の何某こそ、私が父母、十八年以前、頃は夜も長月、廿六夜の月待の夜、数多泊りのその中に、二八あまりの稚児姿、こつちに思へば、その

人も、すれつ纏れつ相生の、松と松との若緑、露の契りが縁のはし、オ、恥かしやつひ、闇がりの転び寝に、つらや人の足音に、恋人も驚きて、起きゆく袂控ゆるを振切り急ぎ行く拍子、ちぎれてわが手に残りしはこの振袖、仮寝の情は浅けれども、妹背の縁や深かりけん、その月より身も重く懐胎し、後に何と詮方も、産み落せしはこの信夫、縁あればこそ子まで設けしもの、この振袖を知るべにて、再び尋ね逢はんと思ひ国を、国を出でて十七年、嬰兒を抱へ様々と、彷徨ひ廻りし憂き艱難、今に尋ね逢はねども、女の念力、これこそは娘よ父よと、名乗り合ひするそれ迄は、身にも変えぬ大事の娘、お役に立てぬは右の訳、卑怯未練でない申訳、ナ申し娘には、どうぞお暇を下されませ、サ信夫、立ちやく、

エ、マ立ちゃいの」

と言へど、立兼ね見捨て兼ね、親子心の、隔ての
重

誰とは知らず、信夫が背骨障子越し『ぐっ』と刺いて一忽ぐり、『ウン』と悶ゆる苦しみに、『こはくいかに、こはいかに』と、傍で見る目の三人は、呆れ果てたるばかりなり

母は泣くやら、氣は狂乱

「さてはく夫婦と言合せ、大事のくの娘をば、ようもく惨たらしい、サ、、、元の様にして返しゃ」と、武蔵にしかつかと縋りつき、泣くよりほかの詞なく、真中に弁慶どつかと座し

「コリヤ、声低くに、ほざきをらう、刻限来れば是非なくも障子越の一決り、これには深き仔細のある

こと、とこ吠えずと、これ見よ」

と、押肌脱げば『こは、いかに』下着の衣の紅に、大振袖の伊達模様

「ヒヤア、その振袖は」

「フ、この片袖はそつちにある筈、いつぞや播州福井村にて、人目を忍びしばしの仮寝、さては汝であつたよな」

「ム、そんならお前がその時の、あのマお稚児さんかいな」

「オ、サ、書写山の鬼若丸だ」

「ヒエ、スリヤこの娘は真実お前のか、子じやないかいな」

「オ、サ初めて顔見る仮寝の父親、殺したはナ、コリヤお主の身代りだわ」

「ハア、はっ」

と、ばかりに母親は、娘の傍に走り寄り

「コレ娘、アレ聞きやつたかいの、そなたの父御といふは、アノ弁慶様ぢやといの。サちやつと御対面申しあぎやいの」

と、抱き起せば、起されて

「母様、何やら仰るさうなが、耳が聞こえぬ、もう目が見えぬ、イヤ申し御夫婦様、便りのないこの母様、どうぞお頼み申します、又母様も今からはお二人様を大切に、お身を大事に長生きして、父様にめぐり逢い仲良う暮らしてください、又二つには私も不憫と思ひ朝夕の、御回向頼み上げます、こればっかりが」

と言ふ声も、次第くにせぐりきて、はや玉の緒も切

れはてゝ、はかなく息は絶えにけり、母は死骸を抱きしめ

「これいこのコレ信夫、ま一度物を言ふてたも、これが一世のく別れかいの言ふて返らぬことながら、背丈伸びるに従ひて、只父様に逢ひたいと、慕ふ子よりもこの母が、どうぞ逢ひたい、逢ひたいと、尋ねさまよひ、マ国々を、めぐりくて今こゝで、逢はぬがましであつたもの、死ぬる今はの際までも、実の父と知らずして、母をかばひし心根が、いじらしいやら、悲しいやら、この胸をさくやうな、同じ殺す道ならば、互ひに父よ娘かと、名乗り合ひした上ならば、この思ひは、エ、マあるまいもの、浮世に心残るである、こればつかりに引かされて三途の川と、死出の山、迷ふてたもんな、迷はぬやう、道は

一筋はるばるぞや、法の光や燈火の影を力にとぼくと歩む姿を、目の先に、今見るやうに思はれて、可愛いわいの」

と、ばかりにて空しき死骸を、抱きしめ声も惜しまず、泣きゐたる

伽羅先代萩

めいぼくせんだいはぎ

〔解説〕

天明五年（一七八五）正月、江戸結城座初演。松貫四（まつかんし）・高橋武兵衛・吉田角丸（よしだつのまる）作。九段続きの時代物。先行の歌舞伎作品に「伊達競阿邦戯場（だてくらべおくにかぶき）」などを加えて浄瑠璃化されたもの。仙台藩・伊達家のお家騒動を取り扱った作品としては最も有名。芝居でも度々上演され、特に忠義と親子の愛情の板挟みになる乳母政岡を描く六段目「御殿の段」は聴く者の涙を誘います。六段目の前半は俗に「飯炊（ままた）き」、後半は「政岡忠義（まさおかちゆうぎ）」と呼ばれています。

〔あらすじ〕

奥州城主の義綱は、吉原の遊女高尾に入れあげて国を顧みないために隠居を命じられ、幼い鶴喜代（つるきよ）君が跡目を継いでいました。しかし、この機に乗じてお家乗っ取りを企てる仁木弾正（にきだんじょう）一味に命を狙われ、鶴喜代君の乳母政岡（まさおか）は、用心のため若君を病氣と称し人々の出入りを制限、我が子千松（せんまつ）をお毒味役にし、食事もすべて自らで整えていました。

◇政岡忠義の段

梶原景時の妻、栄御前（さかえごぜん）が頼朝公からのお見舞いと称し、毒入りの菓子を持って現れます。栄御前が頼朝公からの菓子が食べられぬのかと、鶴喜代君にその菓子を食べさせようとしたところ、千松が走り出て菓子を食べてしまいます。千松は毒に苦しみ始めますが、それを見た一味の八汐は、悪事が露見するのを恐れて、

すぐさま千松を刺し殺してしまいます。政岡は、お上へ無礼を働いた千松は、成敗されても仕方がないと言って、悲しみを押し隠します。栄御前は、八汐の働きを褒めて帰って行き、一人になった政岡は、千松の遺骸を抱きしめ悲嘆にくれるのでした。

(その後、別間より様子を窺っていた八汐が現れ、政岡を亡き者にしようとはしますが、八汐の悪事は白日の下にさらされ、政岡は八汐を倒して千松の仇を討ちます。)

政岡忠義の段

襖押開かせ

梶原平三景時の奥方、夫の権威に栄御前、しとく
と座に直り

「オ、どれくも出迎ひ大儀、自ら今日来りしは、

右大将よりの御上使、夫景時承はれども義綱の一人

鶴喜代、病気によつて男たる者を禁じたと聞きし

故、夫に代るこの栄、義綱隠居のその後、鶴喜代の

所労ことに食事も進まぬ由、御心を付けられしこの

お菓子、頼朝公より下され物、有難く頂戴あれ」

と持たせし菓子箱、差出せば、八汐引取り

「コレハく有難い、大将よりの下され物。サアサ

ア申し若殿様、早う頂戴遊ばしませ」

と蓋押開き

「テモマア見事、結構なこのお菓子、イザ召しませ」
と差出す。さすが童の嬉し気に、立寄り給う鶴喜代

君

「ア、申し御前様、またその様なさもしい事、御病
気の御身なればお毒になつたら何となさるゝ、こつ
ちへお越し」

と政岡が詞、打消す栄御前

「ヤア頼朝公より下さるゝ御菓子、何疑ふて頂戴さ
せぬ。是非この栄が食べさせる」

「アイヤそれでも」

「ム、但し頼朝公の仰せは背いても苦しくないか」

「サアそれは」

「サア」

「サア」

「サア」

に大事の工みイヤアノ大事の菓子を荒らした科、殺したは八汐が働き、さすが渡会銀兵衛が妻ほどある。政岡には自らが言ひ聞かす事もあり、沖の井八汐兩人は暫く次へ間を隔て遠慮召され」

と栄が詞、何と違変も沖の井が深き心は和田津海の汐の八汐も打連れて、伴ひ、一間へ入りにける。後先見廻し栄御前、政岡が傍にすり寄つて

「年ごろ仕込みし其方の願望、成就してさぞ喜び」

「エ、何とおつしやる」

「ア、イヤ、モ隠すに及ばぬ。東西分かぬ内よりも、

取り替へ置きし其方の子の鶴喜代が身に恙なう、義綱の誠の倅千松がこの最期、さぞ本望であらうなう」

「エ、」

「オ、取り替へ子の様子は先立つて知つたれども、もしやと思ひ最前から窺ふて見る処、血筋の子の苦

しみを、何ぼ氣強い親々でも耐へられるゝものぢやない。若殿にしておく我が子が大事、其方の顔色変らぬは取り替へ子に相違はない、スリヤ皆心は同腹中、刑部殿とも内談しめ諸事わが夫の差図あらん、まづ今日は立帰り病氣の様子申上げん、必ず必ず何事も人に悟られまいぞや」

と一人呑み込み、悠々と館をさして帰らるゝ。後には一人政岡が奥口窺ひ／＼て、我が子の死骸抱だき上げ、耐へ／＼し悲しさを一度に『わつ』と溜め涙、せき入り、せき上げ嘆きしが

「コレ千松、よう死んでくれた、出かしやつた／＼／＼／＼なう、其方が命捨てた故、邪智深い栄御前、取り替へ子と思ひ違へ、己が工みを打ち明けしは親子の者が忠心を神や仏も哀れみて、鶴喜代君の御武運を守らせ給ふか。ハ、ハ、ハ、有難や／＼／＼なう。」

これと言ふのも、この母が常々教へておいた事、幼
な心に聞分けて手詰めになつた毒害を、よう試みて
たもつたのう。オ、出かしやつた出かしやつたく
くよなう、其方の命は出羽奥州五十四郡の一家中、
所存の膂を固めさす誠に国の礎ぞや。とは言ふもの
の可愛やなア、君の御為かねてより覚悟は極めてい
ながらも、せめて人らしい者の手にかゝつても死す
事か、素性賤しい銀兵衛が女房づれの刃にかゝり、
なぶり殺しを現在に傍に見てゐる母が気は、どの様
にあらうまどうあらう。思ひ回せばこのほどから歌
ふた唄に『千松が七つ八つから金山へ一年待てども
まだ見へぬ、二年待てどもまだ見へぬ』と唄の中な
る千松は待つ甲斐あつて父母に顔をば見する事も
あらう。同じ名のつく千松の、其方は百年待つたと
て千年万年待つたとて、何の便りがあるぞいの。三

千世界に子を持つた親の心は皆一つ、子の可愛さに
毒なもの食ふなと云ふて叱るのに、毒と見へたら試
みて死んでくれいと云ふ様な胸欲非道な母親が又
と一人あるものか。武士の胤に生れたは果報か因果
かいじらしや、死ぬるを忠義と云ふ事は何時の世か
らの習はしぞ」

と凝り固まりし鉄石心、さすが女の愚に返り人目な
ければ伏し転び、死骸にひしと抱きつき、前後不覚
に嘆きしはことわり過ぎて道理なり

※演者・時間等の都合により多少の異同がございます。

予めご了承ください。